成田重行流 地域開発の戦略学 7

大消費地を活用した販路開拓 (下)

福岡県豊前市

いまも進行中の「内藤とうがらしプロジェクト」。縁が新たな縁を呼び、人とモノのつながりが広がっていく。成田さんは、豊前市から福岡市にも足を伸ばしていった。

文・写真／窪田新之助

豊前市を新宿と結び付け、その特産物を大都市で販売する試みを始めてから2016年で2年目。実験の開始から間もないため、現段階では新宿で豊前市の「内藤とうがらし」の加工品が常時並べられることはない。NPO法人おいしい水プロジェクトが主宰する単発のイベントやフェアで扱うだけである。ただ、今回豊前市を訪れて長期にわたって販売できる萌芽が見えてきた。

新聞店で農産加工品を売る試み

成田さんは実験に参加する加工業者を何社か訪れたとき、そのうちの一社であるみやこハム㈱に㈱新宿高野との取引を提案した。この少し前にタカノの上層部と面会した際、この話を持ちかけていたのだ。タカノにはとりあえず毎年10月に開催する「新宿内藤とうがらしフェア」での試行を依頼している。成田さんは「おそらくこうした話はこれからいくつも出てくるだろう」と見ている。

もうひとつは新宿区の新聞店で通年販売するプランである。成田さんは今回豊前市を訪れた際、区内の今田新聞店で内藤とうがらしの加工品を売ることを提案した。

「新聞店で農産加工品を売る？」といぶかしがるのも無理はないかもしれないが、すでに成田さんは今田新聞店を八百屋に変えてしまっている。といっても新聞店が八百屋になるのは毎週月・水・金曜日の業務が暇になる10時から13時まで。現在は都内で収穫した野菜を並べている。

新聞店にとっては新聞の部数減で売り上げが落ち込むなか、地場野菜の販売で読者へのサービスができる。一方、地方にとってみれば大消費地で販売先が確保できる。双方にとってうれしいことだ。このプランに豊前市の後藤元秀市長は前向きに検討することを約束していた。

ブーメラン効果で「不便さ」を売る

ところで、成田さんが期待するのは内藤とうがらし関連の商品が大都市で売れることだけではない。副次的に狙っているのは「ブーメラン効果」だ。本連載「豊前編㊤」で触れたように、「ブーメラン効果」というのは「地域が都会に商品を投げて、それが売れて認知度が上がれば、観光や移住の促進も期待できる」とする成田さんの造語。

これに関しては後藤市長も触発されているようだ。後藤市長は、内藤とうがらしで大都市の人たちから豊前市を注目してもらったその先に観光需要の創出を狙っている。観光のキーワードは「不便さ」。田舎を訪れる都会の人々が求めるのは「便利さ」ではないという。

「たとえば農家民泊して、水道水ではなく井戸水で顔を洗えることだけで人は来るんだよ。そこには一泊何万円も払う高級旅館とは全然違う価値がある」

宝物を知っている地域の「スーパーマン」

そうした観点から大事なのは地域の住民である。宿泊先のロビーでそ



■プロフィール

成田重行（なりた　しげゆき）

1942年生まれ。70年立石電機（現オムロン）入社。91年同社常務取締役、2001年ナルコーポレーション代表。地域プロデューサーとして、全国30カ所の市町村で地域の活性化を支援してきた。05～09年スローフードジャパン副会長、2000年中国国際茶文化研究会名誉理事。多摩大学、立教大学、東北福祉大学などで講師・教授を務めた経歴もある。

大消費地を活用した販路開拓㊦



豊前市の浦野醤油醸造元は内藤とうがらしを使った甘酒の開発を進めている。写真は当主である浦野惇美さん・雅人さんご夫婦

んな話をしている最中、後藤市長が突然手招きしたのは宿の受付の人。温和な表情に笑顔を浮かべている60代くらいの細身の男性だ。

「彼はワラビやウナギ取りをさせたら名人。ウナギの餌となるのはタニシのすりつぶしたのやミミズなんか。それらを仕掛けの中に入れて、水中でにおいを出させる。しばらくしてから、仕掛けを持ち上げてみるじゃない。そのときにドサッて音がしたら、ウナギは入っている。この辺りには、アケビもいくらでもあるよね。シーズンごとに、どこにどんな宝物があるかは彼なんかみんな知ってる。こんな都会じゃできない体験をさせてくれるスーパーマンは田舎には彼のほかにもたくさんおるわけよ」

地域の人たちにとってみれば、ワラビやアケビは当たり前にあるものだし、そのありかを知っているのはまるで大したことではない。ただ、都会の人にとってみれば違う。ワラビやアケビは宝物だし、そのありかを知っている人は「スーパーマン」である。内藤とうがらしで新宿とのつながりを確固たるものとした後、豊前市に問われてくるのは、そうした農村の資源を活かして誘客産業を興せるかどうかなのだろう。

トウガラシゆかりの福岡市唐人町とも

今回の取材でもうひとつ面白い動きとして感じたのは、内藤とうがらしを核にした連携の輪が、予想を超えた形と方向で広がりつつあるということだ。

成田さんが内藤とうがらしを普及しているのを耳にして、新宿御苑の近くにある建築事務所の代表者が新宿・花園町での協力を申し出てきた。その方を仮にAさんとしておこう。成田さんはAさんからその経歴を聞いて驚いた。出身高校が後藤市長と同じで、福岡市の修猷館であるという。しかも後藤市長を間接的に知っているそうだ。

話はこれだけでは終わらない。そのAさんは福岡県議会議員のなかに知り合いがいて、その県議は元県議会議員の後藤市長とは旧知の仲だった。Aさんがその県議に成田さんの活動を紹介したところ、地元の福岡市唐人町でも街おこしの支援をしてほしいと打診してきたのである。唐人町は多くの地方商店街がそうであるように、活気が低迷しているのに悩んでいるのだった。

成田さんが目を付けたのは、唐人町の地域には江戸時代に活躍した本草学者にして儒学者の貝原益軒の墓所が存在すること。貝原はその代表作『養生訓』で国内の文献では初めてトウガラシを紹介している。

成田さんは県議から相談を受けた際にぴんとひらめいた。日本で初めてトウガラシを紹介した貝原の眠る唐人町の地域と食べる文化が最初に根付いた新宿には、豊前と新宿の連携をそのまま当てはめることができるのではないかということだ。唐人町でも内藤とうがらしのオリジナル商品をつくり、新宿で売り込めるのではないか。

成田さんは豊前市での取材の翌日、さっそく唐人町の商店街の組合員たちに会いに向かっていった。これからどうなるかが楽しみだ。

内藤家のルーツ伊那地方とも連携

じつはもうひとつの連携ができつつある。それは内藤とうがらしの発祥ともいえる長野県伊那地方とのつながりだ。

本誌でも「農村経営者」としてたびたび登場している、同県飯島町の田切農産で代表を務める紫芝勉さんが今年から、成田さんの依頼を受けて内藤とうがらしの加工品づくりなどを試みる予定である。

ところで蛇足かつまったく個人的な話だが、筆者は大学卒業後に入社した新聞社で最初に赴任した福岡市で、貝原益軒の墓所の近くに10カ月弱住んでいたことがあった。さらにいえば、長野県伊那地方は筆者の父方の祖母の出身地。またすでに触れたように、豊前は母方の故郷である。なんとも奇妙なめぐりあわせを感じずにはいられなかった。

そうした不思議な縁をもたらした成田さんからあるとき、彼が60年以上前に通学していた杉並区の小学校が筆者の卒業校であると聞かされ、また驚かされた。もちろん単なる偶然であり、なんということもない話であるのだが。

とにもかくにも内藤とうがらしを巡る今回の旅では、人やモノのつながりをたどるとともに、それらが予想外に結びつき、形をなしていくことを知ることになった。

加えて、人やモノをつなげる成田さんの静かなる情熱と行動力に改めて感銘を受けた。